

約束の丘で
後編

文
D
||
零式

イ
ラ
ス
ト
十
架

奥付	あとがき	エピソード	TRUTH	SEVEN	西山大喜	目次
9 6	9 4	9 0	5 5	3 6	5	3

※この話はフィクションです。実在する人物・団体・事件などとは一切
関係ありません

西山大喜

ななこの熱はようやく下がり、二気分に大学とバイトに精を出しているようだ。一つ心掛かりなことが消えてホッとす。

あと二人。

あと二人の魂を貰い受けることで、オレはななこに想いを伝えることが出来る。

もう少しの辛抱なんだ。

そう決意するオレの頭の中に死神の音が響いた。

『四人目は西山大喜』

「それで、いつだ？」

『七月七日』

西山大喜と七月七日——そして恋人——。

そうか。西山大喜と織り姫はもう出逢えなくなるって事か。

七夕に喩えて一言で片付けようとしている自分に気付いて頭を大きく振りかぶる。他人の魂を受け取る——命が失われるという感覚が麻痺しているのだからか。

西山大喜とその恋人の気持ちをちゃんと考えなくちゃいけない。ななこに会えないオレがどんな気持ちだったか。二度と会えないわけじゃないのに、どれほど寂しかったか。しつかりと思いつい出せ。

オレの寂しさと、西山大喜の寂しさ。

ななこの寂しさと、西山大喜の恋人の寂しさ。

そんなことを考えていて、オレはハツとした。

「なあ、西山大喜ってS I Nの本名って事はないよな!？」

何を思っているんだオレは。

オレとななこが憧れるバンド、F e n r i r が夏のツアーに先駆けて、結成された七月七日にライブを行うこと。そしてボーカルS I Nの恋人が相方を務

めていること。

偶然に決まっている。

だけど、オレに与えられた死神の力は偶然だとは思わせてくれない。

『何を言っている？』

そっだよな、そんなわけ——。

『西山大喜は現時点でただ一人——つまりはそういうことだ』

『げ、原因は！？』

『過労・ストレスによる虚血性心疾患——つまりは心筋梗塞だ』

過労とストレスで死ぬだって？

あのSINが、死ぬだって？

『これは運命だ。そして貴様はその魂を得なければ肉体に戻ることに適わぬ。ク

ツクツク』

——ななこ、悲しむだろうな。

だけど、オレが側で支えてやるんだ。

その為にオレは今までやって来たんだ。
やるしかない。

それが運命なら、オレが躊躇う必要なんてどこにもないハズなんだ。

× × ×

オレの病室にななこがやってきた。

手に小さな封筒を持っていた。

「マコト。今日はね、ビックリするモノ持ってきたよ？」

彼女は窓際にあつた丸椅子をベッド脇に持ってきて座った。

「これ、何だと思っ？」

写真屋さんで貰うような光沢のある白い封筒を、ベッドで横になるオレの顔の
前にかざしてみせる。

「えっへへ。手に入れちゃいました」

薄い長方形の二枚の紙切れを。ペラペラと振って、心底嬉しそうに笑っている。紙切れには「Fenrir Special Live -the 7th-」と記されていた。

「ペアチケットだから、マコト、早く目を覚まして一緒に行こうね」
白いなこの指先が、オレの臉を撫でた。

ななこはチケットを封筒にしまようと、オレの枕元に置いて立ち上がった、少し眉をひそめた。

「ん、立ち眩みかな——」

こめかみを軽く押さえて暫し、黙り込む。やがてニツコリと笑顔を浮かべて、「そ、それじゃ、また来るね」と、病室を去ろうとする。

少しおぼつかない足取り。

トントンと指先で軽く耳を叩きながら、ななこは病室を後にした。

ななこが運んできたのだろうか。消毒液の匂いに夏の香りが混じった病室に残されたオレは、丸椅子に腰を下ろして項垂れた。

Fenrirが解散することになれば、オレ達の追いかける目標は霞んでし

まう。S I Nが死ぬって知ったら、ななこはどんなに悲しい思いをするだろう。だけど、それはオレ達の都合だ。

今までだって別れを悲しむ人達を無視するように、オレは魂を頂いてきた。自分が悲しいからって、不平不満を言うのはフェアじゃない。

だったら、早いところ宣告しに行こう。

そして、一刻も早くななこの元へ――。

× × ×

S I Nの部屋には生活感がなかった。

あるのはベッドといくつかの楽器。

人が故に自分の部屋に帰ることなど滅多に出来なくなっていたのだろう。

――過労による虚血性心疾患か。

この部屋の現状を見てそれが現実のモノとして見えてきた。

恥ずかしい話だが、人気者だつてしつかりプライベートの時間を取れるものだと思つていた。そう巧く、誰か——マネージャーとか——がスケジュールの調整をしてくれているのだからと思つていた。

だけど、よく考えれば分かることだった。

彼らの音楽活動がどれだけハードなものかは、よく考えれば分かるはずだった。

オレはななことSEVEN TRUTHとして、こんな世界に飛び込もうと
していたんだ。

ななこが「大学で音楽を勉強したい」って言った意味を改めて理解したような気がする。あいつは、こうなることをしつかり認識していたんだ。だから、声を——ガラスのように壊れそうな声を維持する方法を探すために、あいつはあの時決意したんだ。

オレは確かに焦つていた。

そして、演奏すらまともに出来ない状態に陥つてしまった。こんなんじや、

世界に音楽を響かせるなんて出来るはず無いじゃないか。

ななこ。待つてろよ。肉体を取り戻したら、しっかりと現実を見て進んでいくから。

だから、もう暫く待つててくれよ。

——ガチャ、ガチャ。

鍵が外れ、ドアが開いた。

ギターケースを右肩にかけ、青いレンズのサングラスをかけた長身の男がそこに立っている。

S I Nだった。

黒いタイトなシャツと、細身のパンツ姿。一分の隙もないような——少しナルシストにも思えるが、流れるような動きでドアを閉めるその姿は、S I Nに間違いなかった。

ボタンとドアが閉まった瞬間、S I Nは床にグツタリと座り込んだ。

「ふう、ただいまあ」

魂が抜けだしてしまいかと思えるような力のない声がSINの口から漏れる。

「ああ、腹減ったなあ。——でも寝なきや、身体がもたねえ」

そう言ったとき、SINはその場で静かになった。

——ベッドが綺麗なままだったのは、もしかしたらベッドで寝ていなかったせいじゃないのか？

床で寝てたら疲れも大してとれやしない。

オレはSINに近づいて、彼をベッドへ連れていこうと手を伸ばした。

「どこのカメラマンだ？」

不意にかけられた声に、オレは手を引つ込めた。

「見ない顔だな？——不法侵入で警察呼ぶぞ」

SINがゆつくりと身体を起こし、凄んでみせる。

普段——「FenrirのSIN」しか知らないが——普段は見せない、

苛ついた表情に、オレは困惑する。

「オ、オレは——」

「どつとどつと出ていけよ！」

SINは立ち上がりながらオレの胸ぐらに手を伸ばした。
空気を掴む手。

そのまま硬直するSIN。

身体の内側に手があるという視覚情報に、オレは吐き気を催し膝をついた。
SINの手はオレの胸から喉、顔、頭を擦り抜けて、空中に静止していた。
「——なんなんだよ」

オレの頭上から掠れた声が聞こえた。

× × ×

何もないリビングの床に座って。

SINこと西山大喜とオレは向かい合っていた。

「はははははっ、それでお前が俺の死を見届けるって訳か」

死の宣告を受けたS I Nは明るく笑った。

「怖くないんですか？」

「怖い？——何が？」

キョトンと、まるで少年のような綺麗な瞳がオレを見つめた。

「あなた、もうすぐ死ぬんですよ」

「ん、そうだな。お前の言うことが本当なら『もうすぐ死ぬ』んだろうな。だ

けどさ——」

そこまで言つて、S I Nは床に置いていたグラスの水をククツと飲んだ。

「人間いつかは死ぬんだぜ？——オレはオレのやりたいことをやって来た。

毎日精一杯やってきたんだ。たとえ、今、この水に毒が入っていたとしても、

きつと後悔しない」

ハハハと、気持ちの良い笑い声を上げる。そして、半分ほどの減ったグラス

の水に視線を落とす。

「まあ——そうだな。ファンを裏切ることになることは正直辛いな」

「裏切りなんかじゃない」

オレはつい、興奮して大声を出してしまっ

「そうかな」

「そうです」

「そう——かな」

「そうです」

「そう——か」

SINはゆつくりと目を瞑って、壁にもたれた。

「こうして目を閉じると見えて来るんだ。初めてやったライブのことが」

ああ。オレにも見える。

あの、学園祭でのSEVENTH TRUTHのライブの様子はハッキリと思

い出せる。観客の歓声と、ななこの声。スポットライトを浴びて輝くななこの笑

顔。

「そうですね」

「あれから何年経ったんだろう。ずっと睦美と走り続けてきたなあ——それが、あと数日で終わるのか」

SINはゆつくりと眼を開くと、白い壁に掛けられたシンプルなカレンダーを見つめた。

「それで——オレはいつ死ぬんだ？」

「——一週間後」

あなたはライブを前にして息を引き取る。

「一週間後って——時間、時間は!？」

オレはゆつくりと頭を左右に振った。

「な、なあ。その日、ライブがあるんだよ。せめてライブが終わるまで、何とかならないのかよ!？」

オレの意識とは無関係に、SINの両手がオレの肩を掴んで揺さぶった。

オレが掴めるって事は——もう、死の世界に足を踏み入れてしまっているんだよ、SINさん。ファンを思う気持ちは有り難いが、オレの前でそんな取

り乱した姿を見せないでくれ。

「——わかった。今更とやかく言っても仕方ないな」

SINは腕時計をチラリと見ると、立ち上がった。

「悪いな、死神さん。これから雑誌の取材があるんだ」

笑った彼の顔は、FenrirのSINそのものだった。

x x x

SINの心残りは「ファンを裏切ること」「ライブが出来ないこと」。

だが、オレにはそれを解決してあげることが出来ない気がする。

三人目の野島泰徳さんの時に、自分で事を起こして、周りの人間に被害を出してしまったオレが、SINの為に何かをしようとすれば——その想いが強すぎるから、何が起きるか、どんな事態がどんな被害が出るかなんて想像も付かない。

それでも、何とかしてあげたい。

なあ、なあこ。

お前だったらどうする？

こんな時、お前だったらどうする？

——そう言えば、最近オレの病室に見舞いに来てないな。

わかってる。

なあこだつて、忙しいんだ。オレのことばかり構っていられる訳はない。

その忙しい合間を縫って、見舞いに来てくれていたわけだし、F e n r i r

のライブチケットを手に入れて、オレと一緒に行くうとしてくれている。

なあ、なあこ。

F e n r i r の歌、お前も聴きたいよな？

これが最後のライブになるけど、だからこそ、最後まで聴きたいよな？

そうだよ。

オレはF e n r i r の——S I N の歌を聴きたいんだ。

そして、Fenrirを待っている人達がたくさんいるんだ。
だったら、オレがやるべき事は一つ。

——SINに歌わせてあげることだけだ——。

× × ×

七月七日午後六時。

梅雨が明け、高く広がる空が少しばかり黄色く染まり始める頃。

アリーナは人で埋め尽くされていた。

Fenrirにとって、そしてFenrirのファンにとって、とても大事なコンサート。

全てが七年前のこの日から始まっていた。

開演までは後三十分もあるというのに、ファン達の盛り上がりはアリーナを揺るがす勢いだ。

本当なら、オレもこの場で Fenrir の最高のパフォーマンスを楽しんでいたに違いない。

だけど、オレは知っているから。

これが最後だと知っているのに受け入れられないから、みんなのようにテンションが上がることはない。

ステージの裏から楽屋へと向かう。

観客の歓声だろうか、轟々と廊下が響いてくる。これが、Fenrir にか
けられた期待の大きさ。

それは、想像以上に恐ろしく、想像以上に重かった。

この重圧に耐え続けて七年——。

あなたはそれで、楽しかったのか？

あのステージで見せてくれた表情は、偽りではなかったか？

考えても答えは出ない。

直接尋ねたとしても、そんなこと正直に話してくれるわけもないだろう。

——あ。

考えに集中し続けていたからか、楽屋を通り過ぎるところだった。

オレは楽屋の扉を開ける。

と、畳の上で肩を寄せ合ったS I Nと森本睦美——いや、今はM Y Uか

ーが静かに瞳を閉じていた。

部屋の中にはあの、空気の振動が響いている。

それを聴きながら、二人は静かに壁により掛かって、互いの指を絡めていた。

よく見れば、その指先が細かく動き、リズムを取っているようにも思える。

「まだ、怖い？」

M Y UがS I Nの耳元で囁いた言葉が、辛うじて聞こえた。

「ああ——怖いよ」

心なしか震える声で、S I Nが答える。

あのS I Nが震えてる。

指先でリズムを取っているんじゃないかった。

何かが怖くて、それで震えていたんだ。

「今回はいつも以上ね？——まあ、無理ないか」

MYUはそう言うのと空いていた左手でSINの頭を抱き寄せた。

「大喜は幸せ者ね——大好きな舞台の上で、歌を響かせながら、歓声を浴びながら——逝けるんだから」

「だけど、オレは——睦美が心配で」

「私の事なんて心配しないで。すぐにお迎えが来るんだから——そうでしょう？」

MYUの視線はずっとオレへ——いや、オレの後ろへと向けられていた。

『——そういうことだ。クックック。森本睦美は二週間以内に悲惨な死を遂げることになる』

ゾクリと背中が緊張した。

振り返るオレの目にはつきりとあの死神の白い仮面が見えた。

「おい、あんた——それって一体どういうことだ？」

MYUが死ぬって？

どんな冗談だよ？

『私の担当する魂がじきに肉体を離れるということだが、それが何か？クックック』

黒い霧のようなマントを仮面の口元に当てて不気味に笑う。

『ついでに言うなら、西山大喜のタイムリミットは一時間半後——』

一時間半っていつたら、午後八時。

ライブの最中じゃないか！？

「な、なあ、死神」

SINがオレ達を見つめて叫んだ。

「頼む、最後まで唄わせてくれっ！ オレはコイツと、睦美と唄っていたんだっ！！」

『無理を言うな——これ以上の譲歩は出来ないと約束しただろう？』

死神の視線は真っ直ぐにMYUを捉え、その視線に耐えられなかったのか、

彼女は僅かに俯いた。

『森本睦美の想いの強さを利用して様々な要素を整えていった結果、彼女の命日が七月六日から、明日より二週間以内に死ぬに変わった——これは最大限の譲歩だ』

「悪魔に魂を売ったってこと？」

オレの問いかけに、死神はニヤリと——仮面の下でニヤリと笑った。

『これは契約だ。——七月七日には死なない——かわりに、最後には悲惨な死が待っている。それを彼女は受け入れた』

「な、ならオレも契約する！」

SINが身を乗り出す。

『無駄だ。西山大喜の担当は、そこの見習いだ。そんな力、持っていない』

「そ、んな……」

『——ハルハラ——いや、スプリングフィールド』

死神の言葉が直接頭の中に響いてきた。

『分かっていると思うが、力を使えば貴様は消滅する。力を持たない状態で契約をしようものなら、そのしわ寄せが本人以外に及ぶこと、頭に留めておけ！』

——もうじき、貴様は元の身体に戻るのだから、余計なことをするな』
分かっている。

そんなことは分かっている。

——ただど——オレは、二人の歌を聴きたいんだ。

開演直前に、ななこは会場へとやって来た。

携帯電話を開くと、待ち受け画面にはオレの写真が表示されている。それをステージに向けた。

ななこ、それじゃ遺影みたいじゃないか。

ああ、ほら、警備員さんに注意されてる。撮影禁止だもんな。携帯電話もダメだよ、そりゃ。

でも、オレと一緒に来ようとしてくれたんだな。ありがとう、ななこ。
携帯電話をしまつて、ななこは替わりにメモ帳を取り出した。

ステージを見つめて、照明の配置なんかをメモしていた。ステージングの参考にでもするつもりだろうか。

まったく、お前は、こんな時くらい楽しめばいいのに、「SEVEN—TRUTH」のことを考えてくれるんだな。

暫く何かをメモしていたななこだったが、やがて指先で耳元をたたき始めた。なんだろう。リズムでも取ってるのかな。

それとも、この歓声で耳の調子が悪くなったのか？——でも、ライブってそういうもんだろ？

ほら、始まるぜ。

正真正銘、F e n r i r最後のライブが。

会場の照明が一斉に落とされる。

ざわついた空気が一瞬にして凍り付く。

そう、まるで北欧神話のフェンリルが、全ての音を飲み込んでしまったかのよっに。

観客の感覚は、すでにフェンリルにしか向いていない。

暗闇の中に一筋の青白い光が流れる。

光の中に浮かび上がったのは、二つのシルエット。

〔燃え盛る炎のように

熱く激しく

君を愛することができたら

燃え尽きることも厭わない〕

ボンツとステージから炎が立ち上り、アリーナを真っ赤に染める。

そしてその炎が途切れたとき、SINとMYUの姿が現れた。

——キャアアアアアッ

歓声がステージを包み込む。

期待のこもったその声を一身に受け、先程まで震えていたはずのSINがい

つもと変わらない勢いで歌っている。



〈輝く季節に

出会った二人

熱い太陽の下で

あなたが輝いて見えたから〉

盛り上がる観客とは対照的に、オレの気持ちはだんだん塞ぎ込んでいく。

——ただの解散コンサートなら、まだこんな気持ちになんてならなかったはずだ。解散といっても、またいつか再結成する可能性が残っているからだ。

——ただ、今回は違う。

もう二度と、この眼で彼らを見ることはできなくなる。

カウントダウンは始まっている。

もう、これがS I Nの最後なんだ。

——浮かんでくる実体の無い涙は空中に霧散する。

——ライブはプログラム通りに進んでいた。

x x x

トークなどを交えながら、ライブはいよいよファイナーレへ。

だけど、オレには分かっていた。

もう時間が無い。

だけど、オレにはどうすることもできない。

オレは結局、SINの最期の希望を叶えてあげることができないんだ。「歌
わせてあげる」と息巻いていたオレには、大した力なんてありはしない。

『それでは最後の——最期の曲になります』

MYUが先程までの気さくな口調とは違って、噛み締めるように言った。

『聞いてください——Thank You』

SINが観客に向けて、深く頭を下げた。

照明がスポットライトに変わるのを合図に、静かにメロディーが流れ始める。

それはまるでレイクイエムのように静かに、観客の熱気すら優しく包み込むように、ただ静かに。

〈あれからどれだけ歩いてきたんだろう

いくつもの分かれ道　いくつもの夢をあきらめながら

僕は今　ここにいます

〈苦しくて　切なくて

どうしようもなく　泣いていた背中に

あなたが聞かせてくれたメロディ

今もこの胸に

〈あの時　背中を押してくれたあなた

〈立ち上がる力を　与えてくれた君へ

〈伝えたい気持ちがある》

〈飾らない　飾れない

この気持ちを　聞いてください

『Thank You』——

——五、四、三、二——終わった。

これで、もう二度とS I Nの歌声を聞くことは無い。

そうだ、魂を貰いにくんだったつけ？

オレは、S I Nの元へと向かおうとして、動きを止めた。

《君の声 背中を押してくれたから》

——S I Nの声が聞こえる。

そんな馬鹿な!?

さつき、確かに死神の力はS I Nが死んだことを告げていたのにつ!

オレが力を使ってしまったのか?

いや、違う——あの時みたいに、力が抜けて魂が希薄になってるわけじゃない。
なかったらなんで!?

オレの混乱など関係なしに、心に染みる歌声がアリーナに響き続ける。

《私はまた歩き出せる》

《これからも いつまでも 前を見つめていけるから》

《飾らない 飾れない

この気持ちを 全ての人へ

『Thank You』———↓

静かに照明が暗くなり、曲が終わった。

アリーナが歓声に揺れた。

ステージで何かがドサリと落ちる音がしたが、観客の声にかき消され、誰も

気にもとめなかった。

オレは慌てて、ステージに飛んでいく。

マイクスタンドにもたれ掛かるように、両膝をついてS I Nは動かなくなっ

ていた。彼に寄り添って声を殺して泣くM Y Uがいて、バンドのメンバーがた

だ呆然とそれを見つめていた。

—— SINの頬から顎にかけて流れていたのが汗か涙かは分からない。

そして最期まで歌い続けられたその理由も分からない。

もしかしたら「ファンのために最期まで歌いたい」という思いが彼を生かしたのかもしれない。

だとすれば、今オレがもう一度生きるチャンスを与えられた理由も「ななこへの思い」によるものが大きいのではないだろうか。

SINさん、ありがとう。そしてお疲れ様。

あなたの魂は、決して無駄にしません。

アリーナを後にするななこは、足元がふらついていた。

やっぱり風邪がぶり返したのだろうか。

心配になったオレは、ななこが無事に家に着くまで、見守り続けた。

SEVEN

あれから一週間がたった。

ななこへの想いが募る一方で、死神からの連絡は全然無かった。

病室で、ベッドに横になる自分を見つめると、心なしか顔色が悪く感じられる。

肉体と魂とが離れている時間が長くなったためだろうか。

このままいくと、魂の補修が終わるころには肉体は駄目になっているなんてこともありえない話ではなくなりそうだ。

ふと、窓の外が騒がしくなつて、オレは下を覗いた。

どうやら救急車が到着したようで、救急隊員がストレッチャーを降ろしていた。病院内から数名の白衣を着た医者と看護師が駆け出して来る。

あの患者が最後の一人なのか？

だとしたら、早く、早く早く——。

『——クッククッククック』

オレの背後に死神の気配が現れた。

『もはや魂を集めることに罪悪感も感じなくなったか——クッククッククック』

「ち、違うっ！」

確かに、人の死をこうも短期間に見続けて、感覚が麻痺しているような気はする。だけど、それでも——。

『だが、あの者が最後の一人だったらと思つたのだろうか？』

死神が窓の下に視線を向けた気がした。仮面の下でよくは分からないが、これ以上ないほどに顔を歪め、笑っているような気がする。

『——そう慌てるな。五人目——最後の一人は必ず現れる』

窓の下から救急隊員の声が聞こえてくる。

「患者の所持品によれば——彼女は『田村ななこ』一八才——すぐに家
族に連絡を」

——今、何て言った!?

オレは慌てて、窓から身を乗り出す。

額から鮮血を流し、グツタリとして病院内に運び込まれる患者は、ななこに間違いなかった——。

× × ×

ななこは額を七針縫った。

バイト先で、整理していた木箱の下敷きになり、それで怪我をしてしまったらしい。頭を打っているため、念のため検査入院もしなければならぬということ、今は病院のベッドで横になっていた。

病院特有の緊張感を和らげるためか、普段はあまり見ることの無いテレビを点けている。

下らないワイドショー。

トピックはF e n r i rのこと。

最期のライブ。

S I Nが過労死したこと。

そして――。

『F e n r i rのファンに、また悲しい話題です。人気ユニットF e n r i rのM Y Uこと、森本睦さんが亡くなりました。先日亡くなられたS I Nの追悼ライブのリハーサル中に、演出用の火薬が爆発、森本さんは全身に火傷を負い病院に運ばれ、そのまま息を引き取りました。F e n r i rの過激な演出には批判の声もあり、警察では――』

そう。

M Y Uが死んだ。

死神が言っていたとおりの悲惨な最期だった。

「ソレ」がM Y Uなのかさえ判らないほどに黒焦げになった彼女は、果たして幸せだったのだろうか。「S I Nと歌う」という願いの代償として等価な結

未だったのだろうか。

オレ達死神は未練を無くすために死の宣告をしている。

その未練を断ち切るためなら、ある程度の協力もする。

だけど、MYUはこんな最期で良かったのだろうか。

考えても、考えても答えなど出るわけではないか。それにこのノイズ……

テレビの音がうるさくて、考えに集中できないのも原因か。

ふと、テレビに視線を向けると、いつの間にかボリウムが随分と高めに設

定されていた。

不思議に思っただけなのに視線を向ける。

何事も無かったようにリモコンを操作して電源を落としたなごは、時計の

針のように正確に落下を続ける点滴の薬品に目をやり、ポツリと呟いた。

「こんなことしてる場合じゃないのに」

そして、また、例の仕草をはじめた。

トントんと指先で耳元を叩く。

何かのおまじないのようにも見えるその仕草に、オレはしばし見とれていた。やがて手を下ろしたななこは天井に視線を向け、ハミングで歌い始める。

少しだけ開かれた窓から歌声は外へと広がり、代わりに夕立の前の湿った匂いが病室へと流れ込んでくる。

「あ、雨……………」

その匂いに気づいたのか、ななこは窓の外を見た。

見る間に黒くなりはじめた空から大きめの雨粒がポツリポツリと降り始め、病室の窓に跡を残す。

遠くで、時刻を伝える鐘の音が響いているのが、雨音に混じって聞こえていた。

× × ×

翌日。検査から帰ってきたななこは浮かない表情で、黙々と荷物をまとめて

いた。

何か無理をしているような感覚を受けて、オレはななこに近づいた。

近づいて何かできるわけじゃない。

だけど、何かをしてやりたかった。

「ななこ——」

「えっ？」

一瞬だけ、ななこが反応して辺りをキョロキョロと見回した。

オレは、ななこが反応したことに驚いて、二の句が告げなかった。

「空耳——かな？」

そう言つてななこはまた荷物を片付け始める。やがて、荷物をまとめたなな

こは病室のドアを開いた。

開いたドアに向かつて、窓から緑の濃い匂いが流れ込んでいく。病院の消毒

薬の匂いを押し流していくように清々しい風。それに後押しされるように、な

なこは病室を後にした。

少しふらつく足取り。

その足で、ななこはオレの病室へと向かった。

相変わらず寝たきりのオレを見て少しだけ微笑んだななこは、丸いすに腰掛けた。

「——もうすぐ夏休みだね？」

ななこはそう切り出した。

「その前に、試験があるんだけどね——その結果で発表会に出られるかどうかが決まるんだ」

試験か。大学のことなんてさっぱりわからないけど、レポートの提出とかもあつて大変な時期なんだろう。

「だけど、ちよつと自信が無くて」

何言ってるんだよ。お前いつも通りやれば大丈夫だって。

「あ——まただ」

ななこはそう言つて、耳元に指先を添えた。

何かに怯えるように、ななこの眼が開かれ、肩を震わす。

トントン、トントンと独特のリズムを刻むように、耳元を指先で叩くようにしながら、ななこは、ブツブツと何かを繰り返して呟く。

今までななこが見せたことの無い苦しそうな表情。だけど、ななこに何が起きていたのかが分からない。そしてオレには何もしてあげることができない。

それが悲しくて、辛くて、悔しくて。

オレは、ななこを置いて病室を後にし、繁華街へと向かった。

木陰で寄り添うカップル。

携帯電話で何かを謝りながら、足早に歩くサラリーマン。

道に広がって騒ぎながら歩く学生達。

ティッシュを配る男。

すれ違う人が全て最期のターゲットに見えてくる。

——誰だ。最後の一人は誰だ。

誰でもいい。早く、オレの前に魂を差し出せっ！

『慌てるな——クッククック』

「あんたか。——最後の一人はどうなってる!？」

現れた死神にオレは食って掛かった。

『まあ、待て。——この世には死が満ちている。ともすれば、貴様の隣にいる奴が突然死ぬこともある』

「だつたらなんだ」

『だが、貴様の魂を修復するのに釣り合う魂は決して多くはない。——その魂の選定に思いのほか時間がかかつてな』

「どういうことだ？」

『貴様が魂の力を解放してしまったために、修復計画にズレが生じた——そこまでは理解できるか?』

魂の力を解放——飛行機事故の件か。魂の力を使ってしまった分、修復と同時に、魂の力自体を補給しなくちゃいけなくなつたっていうことか?

『頭の回転が速くて助かるぞ。魂を肉体に戻す——いや、肉体という殻に閉

じ込めるには、魂に負担をかけなければならぬ。魂の力が減少していれば、その負担に耐え切れず——クッククック』

「ああ、分かった分かった。それで、最後の一人は誰なんだよ」

『魂を修復、かつ、貴様が失ったエネルギーを補給するに足る人物が一人見つかった。しかも、どういうわけか、死亡時期が前倒しになっている。日時に揺らぎはあるもののコイツを使わない手は無い』

言つて、死神はクッククックと笑つた。

「そ、そうなのか！？ だったらすぐにそいつを教えてくれ！」

これで、ななこを支えてやれる。これで、やっと元の生活に——。

『最後の一人——その名は「田村ななこ」だ』

死神は少し寂しそうに言つた。

× × ×

——なんで、こんなことになってしまったんだろう。

オレが、ななこに逢いたいって思ってしまったから？

オレがむやみに、力を使ってしまったから？

ななこに逢いたくて、この想いを伝えたくて今まで頑張ってきたのに、オレが元の体に戻るためにはななこの命を引き換えにしくちやならないなんて。

オレ、何か悪いことしたのかな？

あの時、あの丘で、オレがななこの進学を止めていけばよかったんだろうか。それとも、一緒に東京に出てくればよかったんだろうか。

いや、何を言ってもどうしようもない。

ななこは「二週間以内に死ぬ」。それはたとえば、オレがななこの魂じゃない誰かのものを得るとしても、変えられない。

降り出した雨の中に立ち尽くす。

冷たくも無い。

痛くも無い。

ただ、雨がオレの体を擦り抜けていくだけ。

空っぽだ。

もう、どうでもいい。

目の前を、水飛沫をあげながら走り抜けていく車。
びしょ濡れになったジーパンのように、心が重い。

——あと、二週間。

オレはななに何をしてあげられるだろう。

ゆっくりと歩き出す。

行き先なんて無い。

ただ、ゆっくりと歩き出す。

人通りの少ない静かな路地を歩いていく。

踏切を通り過ぎれば、ななこの大学があっただけ。

自然に、オレの足はそちらへ向かう。

ななこの大学に行くこと、東京に来てから一度も無かったな。

ポツリポツリと並ぶ街頭に照らされて、向こうから青い傘を差した人影がやってくる。

——ななこだ。

講義の帰りだろうか。どこかぼうつとした表情で、ななこはフラフラと歩いてくる。足取りは重く——まるで、自分の死を知っているかのように重く。僅かに口が動いているようにも見えるが、何を喋っているのかは聞き取れない。

耳をトントンと叩くあの仕草。

ああ、見てられない。

カンカンカンと踏み切りが鳴り、赤いライトがチカチカと点滅する。

その赤い光に浮かび上がるななこの瞳は虚ろで、今にも壊れてしまいそうに見える。

遮断機の前で立ち止まり、頬を風ぐ風に翻弄されるようにフラフラと揺れるななこの身体。

不意に強く吹きつけた風に押されるように、ななこが踏み切りに向かって倒れこむ。

パアアアアアアッ

けたたましい警笛。

青い傘が空高く舞い上がり、ななこの姿が光の筋に掻き消されたように見え
た。

「な……何で——」

オレは何もできずに立ち尽くしていた。

二人目——健太君の最期が頭をよぎる。

車に轢かれた健太君の姿、舞い落ちる青い傘——血みどろのななこ。

『一週間以内に死ぬ』

遮断機の音に混じって、死神の音が何度も何度も繰り返しよみがえってくる。

まさか、あれからまだ数時間しか経っていないのに——つ。

「な、ななこ——ななこおとおおおっ！」

電車は何事も無かったように通り過ぎ、風が電車を追いかけるように吹き荒れる。

——そこに、ななこは居た。

遮断機をぎゅっと握り締め、その場に尻餅をついてななこは居た。

「っ——はあっはあっ」

詰まっていた息が吐き出されるとともに、ななこは激しく肩を動かし酸素を貪った。

震える身体は雨に濡れたせいなのか、それとも恐怖に震えるものなのか。

そして頬を流れ落ちるのは、髪を濡らす雨か。それとも涙か。

オレには何がなんだか分からなかった。

× × ×

三日後。開けた窓から蝉の鳴き声が聞こえてくる、暑い日だった。ななこは

オレの病室へやって来た。

「まだ寝てるの？」

そう言つて、ななこは少しだけ微笑んだ。

眼の下に隈が出来ていた。

それを見逃すはずも無く、彼女が無理をしているのはオレには分かった。

「——ねえ、早く起きて？」

ベッドに肘をついて、ななこはオレの顔を覗き込む。

「おとぎ話みたいにキスしたら——起きてくれるかな？」

いつもと違う。

ななこがいつもと違う。

それが、声だと気づくまで少し時間がかかった。

あのななこの声が、掠れていた。

あれから一体、何があつたんだ？

いや、知っている限りで言えば、あの後、度々車に轢きかけられている姿を

目になっている。だけど、それが原因とは思えない。

「ねえ、どうして何も言ってくれないの？」

ああ、こんな顔、あの時以来だ。

あの文化祭のライブの後のあの丘で。

ななこは「東京へ行く」って言ったんだっけ。

オレはそれに答えることが出来なかったんだ。

今は——今は、ななこに答えることが出来るのだろうか。

いや、ななこに声が伝わるわけは無い——いや、死の宣告をすれば声を聞

かせることは出来る。だけど、オレにはななこにそんなことをする覚悟は無い。

「あ、蝉が——鳴き止んだ」

ななこはそう言つて、照れくさそうに笑つた。

「蝉が遠慮してくれてるうちに、キス——試してみよつか？」

何を言ってるんだ、ななこ？

さつきから蝉は煩いくらい鳴き続けているじゃないか。

ななこの顔が近づいてくる。

「——あれ？」

唇が触れようとしたその時、ななこは少し怯えたように、辺りをキョロキョロと見回した。

耳をトントンと叩くあの仕草。

「なんで——なんで——っ」

頭を抱えて、ベッドに顔をうずめる。

「ダメ、聞こえない——聞こえないよおっ」

おい、ななこ、どうしちゃったんだよ!?

「……マコト、私を一人にしないでえ……」

弱弱しいなこの声は、何も知らずに鳴き続ける蝉の声に霞んで消えた。

TRUTH

ななこの身に何が起きたのか。

あんな浮かない表情をしたのは——救急車で病院に運ばれてからだ。だとしたら、検査の結果に原因があるのかもしれない。

それを知るために、オレはカルテを覗き見ることにした。

カルテ室と書かれた部屋に入ると、大量のカルテの中からななこのモノを探し出す。

カルテ自体は比較的早く見つかった。

だけど、ドイツ語で書かれたそれはオレには理解できなかった。

——だから意識を集中させる。

カルテの中に意識を集中させる。

頭の中に流れ込んでくる文字が、イメージに変わっていく。

診察室。

机の前に座るななこ。

貼り出されるMRI画像。

その隣に貼り付けられたのは途中で途切れた曲線の描かれた紙。

医者の方がゆつくりと動く。

「あなたはトクハツセイシンコウセイナンチョウです」

ななこが訊ねる。

「トクハツ——何ですか？」

「特発性進行性難聴——原因不明で起きる進行性の難聴のことです。両耳に影響が出ていることから、特発性両側性感音難聴の可能性があります。目眩も、バランスをとる器官に異常が発生していることが影響していると考えられます」

「——治るんですか？」

ななこの問いかけに、医者はふうと息を吐いた。

「一般的な難聴であれば、早期発見による治療で進行を止めることは可能です。——しかし、あなたの病気は残念ながら、現代医学では治すことは出来ません。いつか必ず音を失うことになります」

音を失う？

ななこが音を失うだって？

両手からカルテがスルリと滑り、床にパサッと広がった。

× × ×

『宣告はしないのか？』

死神がオレの後をついてくる。

「あなた、知ってていつてるだろう」

『すると、何か？ —— 貴様はこれまで集めた魂を無駄にするというのか？』

「——うるさい、黙れよ」

『クッククッククック——選択肢も時間も限られていることを忘れるな。もしも、覚悟が出来ないなら——代わりに俺が看取ってやるぞ』

そう言い残して、死神は姿を消した。

茹だるような暑さの中、オレは頭を抱えて座り込んだ。

あの時からだ。

あの丘で、ななこに「東京に行く」と告げられた時から、オレのとった行動はすべて裏目に出ている。

あいつの想いにも気づかず、何にも返答できなかったオレ。

あの街で頑張ると息巻いておきながら、何も出来なかったオレ。

ななこにどうしても逢いたくて、新宿で車に轢かれてしまったオレ。

何とかしたいとあがいて、周りに危険を振り撒いてしまったオレ。

その度に、ななこを頼りにして、ななこに近づいて、ななこに「死」を振り撒いてしまった。『死を振りまくことになる』と忠告されていたにもかかわら

ず、近付き続けて、ななこにしわ寄せをしてしまった。

結局、死神の力を得たといっても、オレには何の力も無かったんだ。SEVEN—TRUTHがやってこられたのも、実際ななこの力で、オレは何もして
いなかったんだ。

そして、今。一番助けてあげたい人間を助ける力を、オレは持つてはいない
んだ。

——せめて、ななこの苦しみを取り除いてあげたい。

そのために、オレが出来ることってなんなんだろう。

なあ、ななこ。

オレはお前に何をしてあげられる？

お前はオレに何をして欲しい？

教えてくれよ——ななこ。

死神がオレにななこの死を教えてから一週間が過ぎた。

幸い、この一週間はななこの身に「死」の影響は出ていない。ただ、少しづつ何かが変わっていた。

もう時間が無い。

覚悟を決めなければいけない。

オレは重い足を引き摺るように、ななこの元へと向かった。

病院の一室。

朝の太陽の光が差し込む、白だけが支配したその空間のベッドにポツンと一人、ななこが居た。

ガチャリと扉を開けて入ってくる看護師に一瞬遅れて反応すると、ななこは口をパク。パクと動かしした。

——お・は・よ・う・う・ご・ご・ざ・い・ま・す——。

「おはよう、よく眠れた？」

看護師の言葉に、笑顔を浮かべるななこ。だけどその眼の下の隈は隠せるも

のではない。

「もしあれだったら、薬出して貰えるよう頼みます？」

ななこは首を左右に振ってから、ぼうつと窓の外に視線を向けた。

看護師は暫く血圧などを検査してから、部屋を出て行く。

「どうだね？」

部屋の外で医者が待ち構えていた。

「——無理してますね」

「そうか——。辛いだろうな、彼女にとって歌を歌えなくなるってことは」

医者言う通りだった。

ななこの耳はいつか聞こえなくなる。

聞こえなくなれば、当然、自分の声すら分からなくなる。それは音程が取れ

ないことを意味するわけ——。

まだ耳が聞こえるうちに、せめて発表会でステージに立ちたいと思ったのだろう。無理な練習を続けた彼女は、あの声を、あの繊細な声からしてしまっ

た。

精神的な影響も大きかったのだろう。暫くして声が出なくなつた。

ななこは声を失つた。

彼女にとつてこれほど辛いことがあるだろうか。

少しでもななこを支えてあげたい。

少しの間でもななこを支えてあげたい。

だからオレは決心した。

ななこの前に姿を現す事を。

× × ×

「——ななこ」

勤めて明るい声でオレはななこに話し掛けた。

ななこは少し悲しそうな顔で俯いた。

「——ななこ、オレだよ？」

もう一度話し掛ける。だけど、ななこは耳を塞いで頭を振った。

——壊れてしまった耳が「幻聴」を聞かせていると思つていいのか。

「ななこ」

言いながら、オレはななこの肩にそつと手を伸ばし、抱き締めた。

ビクつと身体を震わせ、息を飲むななこ。

彼女の温もりが伝わってくる。

肉体を持たないオレに彼女の温もりが伝わってくる。

やつと、触れ合えた。

やつと触れ合えたんだ。

オレの視界がぼやけていく。

ななこの姿を、ななこの表情を焼き付けておきたいのに、それが出来ない。

「ななこ——オレ、ここにいろよ。側にいろよ」

ななこが口をパクパクと動かした。声にならない、空気が漏れる掠れた音

が耳元を撫でる。

「ただ、オレには聞こえた。」

「——マコト」

オレに向けられたななこの想いが聞こえた。

「ごめんね——私——壊れちゃったよ」

ななこの想いが伝えたその一言で、涙が溢れて止まらなくなった。

もう、何も考えられない。

ただ悲しくて悔しくて——愛しくて。

オレ達は抱き合ったまま、泣き続けた。

x x x

それから暫く経って。

オレ達はどちらとも無く身体を離した。



無言の間に流れる蟬の声。

それすら、今のななこには聞こえていないのかもしれない。

だけど、オレは話さなくちゃいけない。

そして、どうすればいいのかを考えなくちゃいけない。

残された一週間でどう過ごすのかを。

「なあ、ななこ——伝えなくちゃいけないことがあるんだ」

(なあに?)

心と心の会話。

たとえ耳が聞こえなくっても、オレとななこは、お互いの言いたいことを理

解できているようだ。

「お前——一週間以内に」

「——死ぬのね？」

そう言つてななこは笑顔を見せた。

(あはは、ウソウソ——)

「いや、ウソや冗談なんかじゃないんだ」

「——え？」

彼女の表情が曇った。

「オレは今、死神なんだ」

オレはこれまでの経緯をゆっくり、一つずつ、ななこに話して聞かせた。あと一人、魂を集めれば元の身体に戻ることも話した。

だけど、ななこがその一人だつてことはどうしても言えなかった。

ななこはオレの説明を黙って聞いていたが、やがて僅かに口を動かしてオレに伝えてきた。

「私——いつでも一人ぼっちじゃなかったのね。マコトが側にいてくれたんだ」

何かを噛み締めるように、ななこは頷くと、オレをしつかりと見つめた。

（私はどういう風に死ぬの——やっぱり交通事故なのかな？）

「いや、まだ分からない」

——恐らく交通事故で死ぬというのが最も可能性の高いシナリオだ。踏み切りで轢かれそうになって以来、ななこは幾度となく、車に轢かれかけている。急速に耳が聞こえなくなっていること。

それはまるで水槽の中に閉じ込められたように音が遠ざかっていく感覚。

当然、車の近づく音だって聞こえなくなる。耳が遠くなるのと同時に襲ってくる目眩・平衡感覚の消失は車道に向かってななこを倒れ込ませるのに充分なものだ。

だけど、幸運にも、ななこはギリギリのところまで事故を回避し続けている。このまま行けば、最期まで無事で居られるかもしれない。

だけど、ななこはそんな危険な目に遭い続けることに耐えられるのだろうか。ただでさえ、音を失うという現実を突きつけられ、声を失い、死を宣告されたななこの精神が残りの一週間で耐え切れるのだろうか。

いや、耐えられるように支えてやるのがオレの仕事だ。オレがななこにしてあげられる唯一のことに違いない。

「なあ、ななこ——オレ、こんな身体だけどデ、デートにでも行かないか？」

ななこは一瞬驚いた表情を浮かべたが、少しはにかみながらコクリと力強く頷いた。

× × ×

ななここのデート。

そこら辺のカップルとは違って、オレ達はアイスやクレープを頬張りながら腕を組んで歩くなんてことはしない。

だけど代わりに、そこら辺のカップルが行けない場所に行くことが出来た。

今日は空が高かったので、東京タワーへとやってきていた。

駐車場に止まった観光バスから東京タワーに向かって吸い込まれていく観光客を尻目に、オレはななこを抱えて飛び上がる。

大展望台を通り過ぎ、特別展望台の屋根にフワリと降り立つ。

屋根は真夏の日差しに照らされて、火傷をしそうなほど熱くなっている。だから、オレはななを抱えたまま、その場に留まった。

この日の上空の風は弱くて冷たくて。ななこの汗を拭い去るようにクルクルと吹き抜けていく。

ななこは気持ち良さそうに、目を閉じている。

ただ、それだけ。

相手の気持ち伝わってくるという幸せ。

同じ時を過ごしているという幸せ。

そして、世界中のどんなカップルも出来ない事をしているという幸せ。

それだけで充分、幸せだったんだ。

(ここに居れば、車は来ないよね?)

そう、ななこはオレに伝えてきた。

「そうだな」

(すつとここでこうしていれば、死なずに済むかな?)

「ずつとここに居たら、ダメだな」

(あ、お腹空いちやうもんね)

そう言つてななこはコロコロと笑つた。

(あくあ、いい考えだと思つたんだけどな)

ななこは風を感じて、ハミングをするように息を吐き始める。

心地よいメロディーがオレの心の中に響き、オレに安らぎを与えてくれる。

—— ああ、この人を失いたくない。

この人に歌っていて欲しい。

だけど、こうしていられる時間はもう僅か。

不意にななこがクシヤミをした。

いつの間にか辺りは薄暗くなり、肌寒くなっていた。

「あ、悪い」

(ん——大丈夫)

ななこはそう笑いながらオレにしがみついた。

× × ×

夜の繁華街を歩く。

キラキラと輝く街灯と、その街頭に沿って歩く人の流れ。

その流れに紛れるようにして、オレ達は歩いてきた。

フラフラとするなこの腰に手を回し、彼女を支えてあげながら、ゆっくりと目的も無く歩き続ける。

どのくらい歩いただろうか。

街灯に幻惑されるように、焦点がぼやけて来ていたオレは、人ごみの向こうに黒い影を見たような気がした。

死の足音とでも言うのだろうか。

何かが近づいてくる音が頭の中に響いてくる。

全身が緊張する。

(マコト?)

ななこは不思議そうにオレを見つめていたが、それに構っているような余裕は無い。

死神に肉体と魂を繋ぐ紐を斬られそうになった時のあの気持ちの悪さが、前身を駆け巡っていく。

あの影に気付かなければ良かったのかもしれない。

だけど、オレはその影を眼で探してしまった。

ネオンの向こう。

暗い夜空に浮かぶ三日月。

それが「鎌」だということに気付くまで、そう時間は掛からなかった

奴が——死神が現れたということは、やっぱり。

『看取りの時間だ』

死神はオレに向かってそう告げた。

——きた。その時が来てしまった。

傍らのななこを見つめる。

ななこは何も知らずに、オレに体を預けて微笑んでいる。

「——ななこ」

(何？マコト)

ああ、もうこの声を聞くことが出来なくなってしまうのか。

『五、四、三、二——』

パラパラと砂のようなものが降ってくる。光に照らされてキラキラとまるで

雪のように輝くそれはななこの頭の上に降りかかる。

「——危ないっ！！」

オレはななこを突き飛ばした。

ショーウィンドウに背中からぶつかつたななこは、驚いてオレのを見た。

周りの人間は突然突き飛ばされるようにしてショーウィンドウにぶつかつたな

なこを気味悪そうに見つめている。

——黒い影が落下してきたのはその時だった。

ガッシャアアアアアアンツ

飛び散る蛍光管の破片と、ガラス。

辺りは騒然とした。

落ちてきたのは、ブティックの照明看板だった。

それは、ななこがさつきまで立っていた場所に、無残な姿で転がっていた。

(あ——ああつ)

文字通り声にならない悲鳴をあげるななこをそつと抱き起こすオレの背中に、アイツが声をかけてきた。

『そうか——。貴様に彼女の魂を手に入れる意志が無いのなら、貴様に代わって私が田村ななこに死を与えてやる。——彼女が少しでも早く死の恐怖から開放されるよう、今すぐにでも魂を刈ってやろう。悪く思うな、スプリングフィールド』

三日月の鎌を高く振り上げて、アイツが近づいてくる。

迷つてる場合じゃないつ。

「ななこ、逃げるぞっ！」

叫びながらオレはななこを抱えあげ、上空へ飛び上がった。

アイツが追つて来られない程、遠くへ——遠くへ——遠くへ。

逃げながら、オレの頭にある考えが浮かんできた。

もしも期限の最期まで死から逃げ続ければ、ななこは死なくて済むんじゃないかって。

× × ×

オレ達は逃げ続けた。死の匂いを嗅ぎ分けられるオレは、彼女に降りかかる死の影響を悉く退けてきた。

だけど、今までは死が近づいてくると濃くなっていた匂いが、今では常になこの周りに纏わりつくようになっていた。それと共に、ななこの身体から精

気が薄れ、今にも死んでしまいそうな程に痩せて弱々しい姿になっていた。

あと、一日。

あと一日逃げ切れば、ななこは死なずに済む筈なんだ。

だから、もう少しだけ頑張ってくれ。

オレはグツタリとしたななこを抱きかかえて、死から逃げ続けた。

「ななこ、頑張れっ！」

オレの言葉に僅かに反応したななこはほとんど動かなくなってしまった口を

動かして、何かを告げようとしていた。

「喋らなくてもいいよ、想ってくれれば分かるから」

ななこは軽く頷くと、

(あの丘に行きたいなあ)

と、そう伝えてきた。

あの丘、か。

「よし、分かった。——行こう、あの丘へ」

オレは今来た方向とは反対に向かって飛んだ。

× × ×

海の匂いが漂う。

夕日に照らされたあの桜の木はあの頃と変わらずそこに立っていた。

オレはゆつくりと芝生の上に降り立ち、ななこを桜の木の幹に寄り掛からせた。

(ああ、聞こえる——風の唄が)

ななこは幸せそうに微笑んだ。

この丘を吹き抜けていく風は、あの頃のまま、優しくオレ達の髪を弄んでは逃げていく。

ソヨソヨと揺れる草と桜の葉。

彼女はそれらを身体で感じている。

——あと、何時間だろう。

あと何時間で期限が切れる？

『あと、三時間だ』

背筋がゾクリとした。

振り返ると、死神がオレの後ろに立っていた。

「あ——ああ」

恐怖で声が出ない。もう、逃げようが無い。

『クッククッククック——死から逃れようとするとは、やはり面白い人間だ、貴様は。だが、少し浅はかだな——期限を過ぎれば死から開放されるかどうかも分からずに、逃げ続けた結果が、アレだ』

死神は鎌の切っ先で、ななこの方を指した。

『迫る死の恐怖に怯え続けた彼女は、精気を失った。このままでは放って置いても勝手に死ぬだろうな——クッククッククック』

「ちよっと待ってくれ、じゃあ、期限を過ぎたらどうなる？」

『さあな。貴様がそれを知ったところでどうすることもできまい。それに、たとえ期限を過ぎれば助かるとして——私が逃すと思うか？』

——言葉が返せなかった。

「——ななこ」

ななこは死神に気付かず、風と戯れている。

オレは、またななこを苦しめてしまったのだろうか。

もう——逃げられない。

オレは彼女を失う。

そして、彼女が居なくなつた世界で生きていかなければならない。

ななこの為にと思つて、あの事故から頑張つてきたけど、結局、オレがして

きたことはすべて無駄になつてしまったということだ。

『——いい風だ』

死神はそう言いながら空を見上げた。

『——ギリギリまで待つてやろう』

「——え？」

『ここまで逃げてきたお前の頑張りにも、最期の時を楽しむ時間を与えてやるというてゐる——。クッククッククック、せいぜい最期の一時を有効に使うことだ』

そう言つて、死神は風に吹き消されるように姿を消した。

——アイツ——。

(マコト?)

「あ、ああ」

呼びかけに振り返ると、ななこが自分の隣をトントンと叩いていた。

オレはそれに従つて、ななこの隣に腰をおろす。

(エへvあの頃に戻つたみたいだね)

死を目前にしているのに、ななこは幸せそうにオレの肩にもたれてきた。

「そうだな——ここから全てが始まつたんだ」

まるで昨日のことのように思い出せる。

初めて出会ったあの日のこと。

自分の歌を互いに聞かせあったこと。

ユニットを組んで、練習に明け暮れたこと。

そして、ななこに想いを打ち明けたこと——。

いつも、オレ達はこの丘にいて、いつも二人で過ごしていた。

たくさんの思い出を二人で話して、たまに笑いあっていると、いつの間にか陽が沈んでいた。

もう、時間が無い。

夢を約束したこの丘で。

愛を誓ったこの丘で。

オレ達は最期の時を迎えることになる。

(もう一度、一緒に歌いたかったな——)

ポツリとななこが呟いた。

「——また歌えるさ」

オレはななこの肩を強く抱く。

(そう——だね)

少し笑うようにななこが答える。

(あ、流れ星——)

空を流れる一筋の光。

「ほんとだ」

願い事をすることも忘れて、オレ達は夜空を見上げた。

幾つの星が流れるのを見たのだろう。

ななこが、少し照れくさそうに言葉を投げかけてきた。

(マコト——いつも側にいてくれてありがとうね)

「ああ」

(明日から一人ぼっちになっちゃうけど、私、向こうの世界できっとまた歌を

歌うわ)

「ああ、またお前の歌、聞かせてくれ」

「うん——ごめん、ちよつと疲れた」

ななこはそう言くと、オレの肩に身体を預けたまま瞳を閉じた。

オレがななこの頭を優しく撫でていると、すぐにすうすうと寝息が聞こえてくる。

「歌を歌うって約束、忘れるなよ」

コクリと、ななこが頷いたように見えた。

オレはそれを見て、最後の選択肢を選ぶ決意が出来た。

オレがななこにしてあげられること。

死神の力を得られたオレだからこそしてあげられること。

オレが取れ得る最後の選択肢。

「さようなら、ななこ。お前ならやれるさ——。元気でやれよ」

オレはななこを木の幹に寄り掛からせ、静かにその場を離れた。

死と向き合つて、人の死と関わりあつて、オレが知ったことが一つある。

——この世には奇跡が起きる——つてこと。



そしてそれは、想いという人間のエネルギーによつてもたらされるつてこと。
幸い、オレは肉体という殻から開放されたその「エネルギー」の集合体。
ななこを助けたい。ななこに歌を歌い続けて欲しい。

『——その方法を選んだか』

死神の声が聞こえた。

時間ギリギリつてことか。

『——考え直せ。エネルギーを開放すれば、貴様はこの世界から消滅するぞ。
残された者がどれだけ辛い思いをするかわかっているのか』

「アイツなら大丈夫だ」

『貴様に残されたエネルギーで彼女の運命を変えることが出来ると思つてい
るか？』

「何を言っている？オレは想いのエネルギーの集合体だぞ——少なくとも、
オレが彼女を想つていれば少しは足しになるだろ？」

心臓がドキドキする。

これで巧いかなかったら——いや、そんなこと考えちゃダメだ。

絶対巧くいく、絶対だ！

『——どうやら、何を言ってももう無駄なようだ。悪いがこれも仕事だ。恨むなよ』

死神は鎌を取り出し、ななこの元へと近づいた。

『その魂、貰い受ける』

鎌が眼にも止まらぬ速さで振り下ろされた。

× × ×

『——何をしている？』

死神は呆れたように訊ねてきた。

力が抜ける。

立って居られない。

見れば、オレの腹に死神の鎌が深々と突き刺さっていた。

——間に合った。

『クッ——クッククッククッ——。こんなガキにしてやられた。貴様が盾になったおかげで、期限を過ぎてしまったようだな』

「そ、それじゃ!?!」

『期限を過ぎた後で魂を刈るのは、死神の沽券に関わる——。次の機会まで、保留だ』

鎌がオレの腹部から引き抜かれる。

とたんに力が一気に抜けていく。

身体が消えていく感覚。

(マコト?)

ななこ?

(なんで——マコトが消え——)

「悪い夢は終わりだよ、ななこ——次に目が覚めたら、いつも通りだ」

オレの身体が、光る。

あの飛行機事故の時と同じように丘に光が広がっていく。

「世界に、オレ達の曲——響かそうな」

（マコト、ねえ、どうなってるの！？）

ななこが泣きそうになりながらオレを見つめている。

『——あの時、オレにもお前みたいなのが出来たら——』

死神がそう呟く声が聞こえたような気がする。

「いつでも側にいるから、一人つきりじゃないからな」

零れ落ちる涙も光に変わって、オレはそのまま意識を失っていった。

「マコト——私を一人にしないでええええええええっ！」

最後に、ななこの声が聞こえた気がした。

エピソード

目が覚めると、そこは懐かしい場所だった。

あの頃と変わらず、人気の無い小さな丘。

心地よく吹き付ける潮風と、少し大きくなった桜の木の幹。

傍らに感じていた温もりは、いつの間にか消えていた。

一人つきり。

ここに居るときにいつも側にいた人が居ない違和感。

寂しくて、泣きたくなった。

サワサワと、草が揺れる音が聞こえる。

——聞こえる！？

辺りを見回す。

鳥の囀りが聴こえる

波の音が聞こえる。

だけど、あの人の声は聞こえない。

「——マコト」

あの人の名を呼ぶ。

自分の声が聞こえる。

声が——出た。

「マコト——マコト——マコト、マコト」

もう二度と逢えないようなそんな気がして、私はあの人の名前を呼びながら泣き崩れた。

——ガサリ

膝の下で何かが潰れる音。

それは一枚の紙切れだった。

「ありがとう。そして——ごめん」

それがあの人が残したものだとすぐにわかったのは、そこに綴られる文字に

込められた想いに気付けたから。

照れくさそうに笑うあの人の姿が脳裏をよぎる。

「ねえ、マコト——私、約束守るから」

私はゆつくりと立ち上がる。

潮風が私の背中を押すように吹いてくる。

それがあの人が背中を押してくれたように感じられて。

私は桜の木を振り返る。

幹にもたれ掛かって、ギターを奏でるあの人の姿を思い出せる。

そう、私は一人じゃない。

手にした紙をしっかりと握り締める。

あの人くれたこの歌と一緒に——私、歌い続けるから。

〈約束の丘で 後編・完〉

前編を手にとって下さった皆様、お待たせいたしました。後編から興味を持って下さった皆様は是非、当サークルのHPで前編をご覧ください。

【約束の丘で】の前編を出したのが二〇〇七年八月一七日でした。

「夏の話だから後編は夏コミで出したいよね」なんてワガママを言っていたら落選するわ落選するわ……。それから二年、ようやく夏コミ当選。長かったのか短かったのか、何はともあれ【約束の丘で】を完結させることが出来ました。

さて、最悪のバッドエンドは回避したつもりですが、いかがだったでしょう。全ての人が幸せにはなるのが難しいこの世の中で、せめて物語の中だけでもハッピーエンドになれば……。とも思うのですが、書き手である私の嗜好がど

うしても出てきてしまい、どこか寂しく、悲しいエンドになってしまいました。
完結ということではありませんが、実はまだまだ他にも物語に書きたかったこ
とは山ほどありまして。サークル内でも人気の高い死神の過去とか、彼（彼
女？）の思考とか……。

そのあたりは、原型であり絶賛放置中の【Trigger】でいつか触れられた
らしいかな、なんて思っております。

それでは、また何かの作品で皆様とお会いできることを願っております。
最後まで読んでいただきありがとうございました。

平成二十一年八月吉日

D II 零式

奥付

発行日

平成二十一年八月十六日

発行元

F—LOOP

発行者

D Ⅱ 零式

f-loop-hp@mail.goo.ne.jp

<http://floop.yu-nagi.com/>

印刷

F—LOOPメンバーの手による

約束の丘で

後編



PDF化にあたり

「約束の丘で 後編」をダウンロードしていただきありがとうございます。

子の作品はFLOORのホームページにて一部公開していた小説を元にしていきます。

同作品を手作業で小説化したものは二〇一〇年八月のコミックマーケット76で頒布させていただきました。奥付の発行日や印刷などの項目はその時のデータをそのまま載せております。

頒布から一年が過ぎたこと。前編もPDF化して無料ダウンロードできるようにしたこともあり、後編もダウンロードできるように致しました。

読みづらい部分など多々あるかとは思いますが、楽しんでいただければ幸いです。

現在、新作の制作に尽力しております。

どういう作品形式・発表になるかはまだ明らかに出来ませんが、今後とも応援していただければ幸いです。

それではまたどこかの作品で。

平成二十二年十一月二日

D〓零式

F L O O P

floop-hp@mail.goo.ne.jp

<http://floop.yu-nagi.com/>